デュラグルチド注射液週1回製剤がインスリン導入のきっかけとなった１例

医療法人 久和会 和田記念病院

友田 孝弘

【目的】糖尿病治療において内服薬でのコントロールが困難になった場合、インスリン製剤による治療が検討される。実際には内服薬と異なり注射剤に対する恐怖心などから導入がうまくいかないケースが多い。今回、注射剤の使用経験が全くない、2型糖尿病患者に対してデュラグルチド注射液（トルリシティ®皮下注：持続性GLP-1受容体作動薬）の使用をきっかけに注射薬に対する意識が変わり、アドヒアランスが向上し、頻用されている別のインスリンの注射剤もスムーズに導入することができたので、その一例を報告する。

【症例】54歳男性。41歳で2型糖尿病を発症し、経口糖尿病薬にて治療を開始。経口薬での治療を継続するが、血糖値、HbA1c共に高い状態が続く。主治医よりインスリン治療の必要性を説明されるが、注射針への恐怖心と煩わしさから、その受け入れを頑なに拒否される。ひとつの導入案として、週1回、針の装着がない、簡易性の高いデュラグルチド注射液（トルリシティ皮下注®）を紹介し、本人も納得の上で使用を開始した。

【結果】イプラグリフロジン（スーグラ錠50㎎®）錠50㎎２T１×朝食後、グリメピリド（アマリール錠3㎎®）錠3㎎２T２×朝夕食前、シタグリプチリン（ジャヌビア錠50㎎®）錠50㎎２T１×夕食前による内服3剤での治療から、シタグリプチリン中止→デュラグルチド注射を開始、その後、グリメピリド中止→インスリングラルギン開始。内服のみでの治療時（A）、デュラグルチド注射液追加後（B）、インスリングラルギン追加後（C）での、平均血糖±SDは、A=213±17、B=180±29、C=179±37 ㎎/dlへと低下した。内服のみの治療と比較して、インスリン等注射剤を導入後には血糖値の改善がみられた。

【考察】グッドデザイン賞を受賞した、デュラグルチド注射液（トルリシティ®皮下注）は、煩雑さをできる限り減らした優れた製剤である。一般的なインスリン製剤と比較して、針が見えないことから恐怖心が軽減されている。また、1週間に1回の投薬であり、注射タイミングは食事時間に左右されない等の利点も持つ。「インスリンの注射は絶対にしない」と話していた患者が、デュラグルチド注射液の使用をきっかけにインスリンの導入にスムーズに移行できたことは高く評価される。針の恐怖心を払拭できたことは、針をセットする他のインスリン注射製剤も抵抗なく受け入れることができるとも考えられ、治療の選択肢が広がる。デュラグルチド注射液は、インスリン治療の受け入れを拒否する糖尿病患者へ対して、治療受け入れの一助となる可能性を示唆した。

【キーワード】糖尿病　インスリン